デス・エデュケーション（２）
子供達はいつ頃から死に気づき考えたり会話したりしているか
山田博久# 平川忠敏
（鹿児島大学）

目的
近年デス・エデュケーションの重要性が注目を集めている。私たちは教育を行う上で「子供たちがいつ頃どのように考えたり会話したりしているのか」を知る必要があると考え、この問題について調査を行った。

方法
小学4年生74名、6年生146名、中学2年生137名の計357名を対象とし、自作のアンケートを配布し調査した。アンケートの内容はペットや身近な人の死の経験の有無とその時期、身近な人が死ぬと感じたときに立ち会ったことがあるか、他人に訪れるか、死hipsterか、死について考えるか、他人とこういった話題を話すか、相手の態度はどうだったか、予後不詳の病気で自分や家族が苦しんでいるときどうするかなど約20項目からなるもので、自由記述の部分と選択肢の中から選ぶ質問が混ざっている内容である。

結果
「死についていつ頃からかの問いに対して年少の4歳前後で25%が、年長の6歳前後で60%がすでに知っていたと答えている。どのようにきっかけで死というものを知ったかの問いに対しては様々な回答があり、多い順に「覚えていない」16.0%、「ペットが死んだとき」16.1%、「テレビを見て」14.5%、「人から話を聞いて」14.1%、「人が死んだとき」32.5%、「共に知った」5.0%、「本で知った」4.7%であった。

ペットをなくした経験を持っている割合は小学1年生が34.7%、2年生が45.1%、3年生が59.4%、4年生が68.6%、6年生が80.1%、中学校2年生が80.1%であった。身近な人をなくした体験を持っている割合は小学1年生28.9%、2年生が39.1%、3年生が48.0%、4年生が59.1%、6年生が71.1%、中学校2年生が79.1%であった。小学校4年生146名中、中学校2年生のうち18.8%が身近な人の死に立ち会った経験があった。同じく小学4年生、6年生、中学校2年生のなかで62.2%が死について考えていると答えている。また61.9%が死について他人と話をしたことがあると答えている。予後不詳の病気で自分や家族が苦しんでいる時をどのように考え、どうなりが考えたか、子供たちは年齢により変化することも子供たちが死について考えていることの反映であると言えよう。

考察
子供たちの多くは早い時期から死というものの知っている。幼稚園、保育園の年少に相当する4歳前後で25%が、入学前や小学1年生の6歳前後で60%の子供たちが様々な理由で死について知っているというのがわかった。そのため学校卒業までに「身近な死」を経験し、考えて、他人と話す。たとえば小学校3年生で48.0%が身近な人の死を、59.4%がペットの死を体験していた。また小学校3年生をもってとした小学校4年生、6年生、中学校2年生のうち18.8%が身近な人の死に立ち会った経験があった。同じく小学校4年生、6年生、中学校2年生のなかで62.2%が死について考えていると答えている。また61.9%が死について他人と話をしたことがあると答えている。予後不詳の病気で自分や家族が苦しんでいる時を通じるかの問いに対応をどうするか死後に変化することも子供たちが死について考えていることの反映であると言えよう。

子供たちの死に対する体験、思考、会話に対するどのように援助ができるかを考えることが重要な課題になるであろう。たとえば「死について他人と話をしたことがある」が訪れたものの26.3%あった。教師はこのような経験を持たないかもしれない。あるいは子供たちにどのようなアプローチをするべきであるか。あるいは子供たちに死について立会った経験のある人が死に立ち会った経験のある人が予後に死を重視していると考える。教室の子供たちが死をどのように考えているか、そしてPTSDに対する対策を含むどのように対応が望ましいであろうか。

一方死について考えないと答えたものの12.6%、死について他人と話をしたことがない人が37.3%あった。教室の子供たちが死をどのように考えているか、そしてPTSDに対する対策を含むどのように対応が望ましいであろうか。